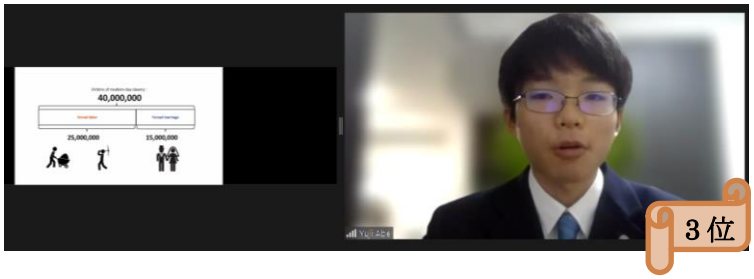
第 10 回 TOKIWA 高校生英語プレゼンテーションコンテスト　2022 年 10 月 22 日（土）オンライン開催

富田学長は、開会の挨拶で、それぞれの掲げる目標がどのようにモチベーションを形成し、行動を起こすきっかけとなったのか、また、その過程で得た新しい視点があれば、ぜひ聞かせてほしいこと、そして各自の発表が影響を与え合い、このコンテストを通じて、共に目標に向かって次のステップを踏み出す原動力になればとの願いを語りました。

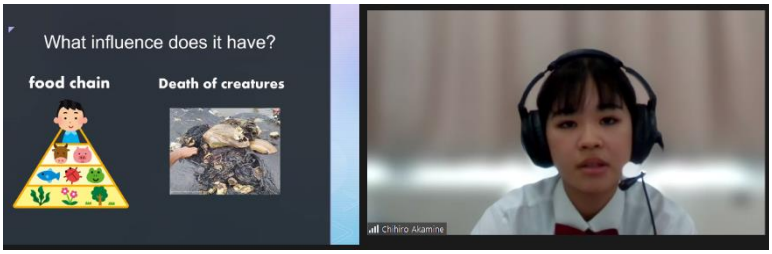
司会を務めた常磐大学人間科学部コミュニケーション学科 2 年の平山桃花さん（左）と常磐大学留学履修生ソフィア・マシチェンコさん（右）。堂々と、そして発表者を和ませつつ、スムーズな進行をしてくれました。

あべ　　ゆうじ
阿部　有志さん（クラーク記念国際高等学校 2 年）
"Modern-Day Slavery"



現存する奴隷制の形態について、自分がこのテーマに関心を持つようになったきっかけ（Youtube 動画）を紹介し、統計的な事実を踏まえ、この問題を終わらせるために自分たちに何ができるかを提案しました。

あかみね　ちひろ
赤嶺　千寿さん（沖縄県立与勝高等学校 2 年）
" Larvae Save the World"

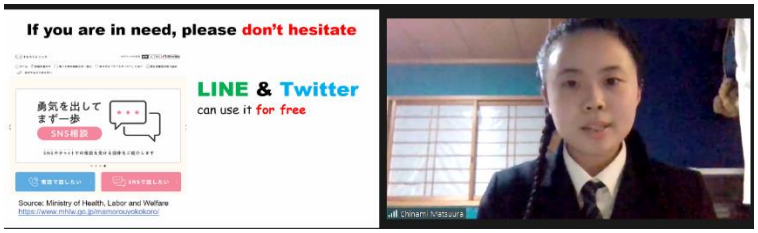


プラスチックごみが、海だけでなく人間を含む陸上の生物にどのような影響を与えるかが語られ、発泡スチロールの処理にミールワームを使うことが提案されました。使い捨てプラスチックの使用量を減らすことやリサイクルの重要性についても言及しました。

ほしな　ちほ
保科　知穂さん（土浦日本大学中等教育学校 4 年）
"The Ideal Needle"

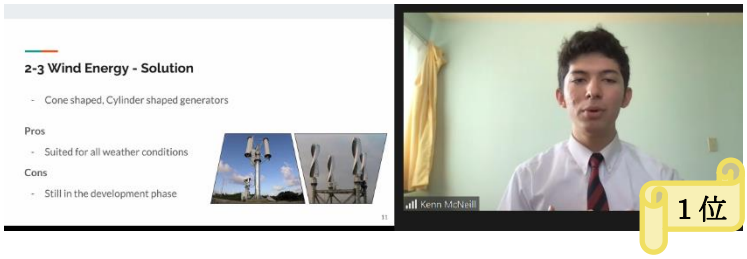
医療用の注射針を使う際、痛みを少なくするには、どのような方法があるか紹介しました。医療用注射をより身近なものにすることで、目標 1（貧困をなくそう）、目標 2（飢餓をゼロに）、目標 10（人や国の不平等をなくそう）など SDGs の目標達成に直接的、間接的に影響を与えうると主張しました。

まつうら　ちなみ
松浦　茅南さん（神戸大学附属中等教育学校 4 年）
"Eating Controlled by Media"



メディアによって引き起こされる可能性のある摂食障害について発表しました。Twitter や Instagram などのソーシャルメディアを盲信し、ダイエットを "ファッション" のように捉えるのではなく、もっと情報を精査することが大切だと強く訴えかけました。

まくにーる　　けん
マクニール　健さん（名古屋国際高等学校２年）
“My Action Plan for Advancing SDG 7”



環太平洋火山帯に位置し、四方八方から風が吹き込む日本が、風力エネルギーや熱エネルギーをどう活用すべきかを述べました。これにより、日本は原子力に代わるクリーンなエネルギーを手に入れ、SDGs の目標 7（エネルギーをみんなにそしてクリーンに）の達成に向けて、効果的に取り組むことができると締めくくりました。

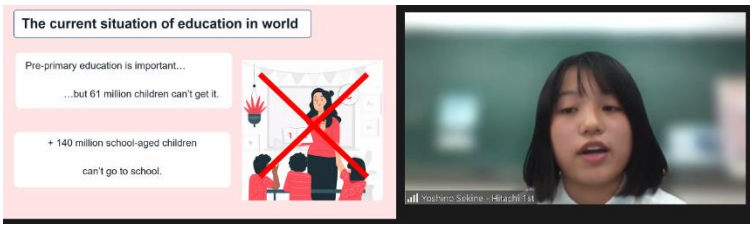
もとなが　ももか
本永　百々華さん（関西国際学園中高等部３年）
“The 20-second Rule”

アメリカの作家で講演家のショーン･エイカー氏が提唱した「20 秒ルール」を引用し、たった 20 秒の努力で大きな変化が起きることが語られました。コミュニティ全体で 20 秒の努力することで、SDGs の目標 13（気候変動に具体的な対策を）、目標 14（海の豊かさを守ろう）、目標 15（陸の豊かさも守ろう）の達成につながることにも言及しました。

おかもと　まほ
岡本　真歩さん（常磐大学高等学校１年）
“He for She, She for He”

男性らしさ、女性らしさという固定観念を払拭するために、人々は考え方を変え、ソーシャルメディアを通じて自分自身の意見を形成し、表現しなければならない（あるいは表現している人々を支援しなければならない）と提案しました。所属高校の母体となる学校の創設者が女性であることから、女性もより高いところを目指すべきだと自らの考えを述べました。

せきね　よしの
関根　由乃さん（茨城県立日立第一高等学校３年）
“Education - The Foundation of All SDGs”

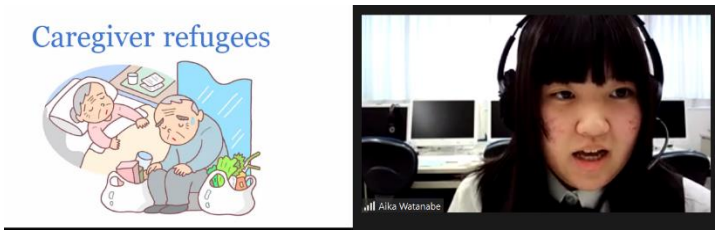


SDGs の目標 4（質の高い教育をみんなに）の意義と、教育はすべての人にアクセス可能であるべきであることを論じました。目標 4 の達成に向けて前進することで、他の SDGs のゴールの強固な土台となると強調しました。“教育は権利であり、特権ではないのです”と締めくくりました。

しき　　こなみ
志岐　こなみさん（沖縄県立与勝高等学校２年）
“Okinawans and Earthquakes”

元神奈川県民として、災害と言えば台風のイメージが強い沖縄県で、地震や津波に対する意識を高める必要があることを強調しました。沖縄県で地震を意識することは、SDGs の目標 11（住み続けられるまちづくりを）を推進することにつながると自らの考えを述べました。

わたなべ　あいか
渡邊　愛花さん（常磐大学高等学校１年）
“For Everyone to Live with a Smile”



介護が必要なのに受けられない「介護難民」を支援することの重要性を説いた発表でした。SDGs の目標 3（すべての人に健康と福祉を）の一環として、ロボット（AI 技術）の活用や外国人介護士の採用、さらには SDGs の目標 4（質の高い教育をみんなに）の達成のため、若者の明るい将来を見据えた質の高い教育の推進など、考えうる解決策を提示しました。

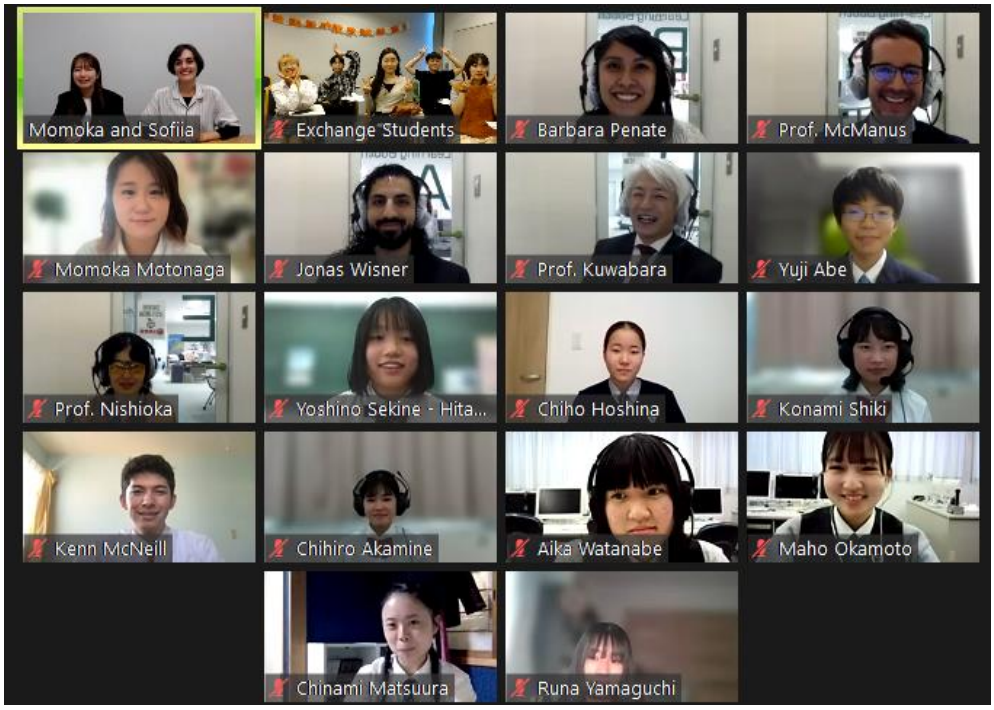
やまだ　あいか
山田　愛華さん（クラーク記念国際高等学校１年）
“There Are Many Genders”

SDGs の目標 5（ジェンダー平等を達成しよう）の一環として、LGBTQIA+の啓発に焦点を当てた発表を行いました。バイセクシャルやトランスジェンダーを自認する方が身近にいる彼女は、LGBTQIA+の人々が直面する問題を解決し、近い将来、日本が変化を受け入れることを願いながら、どのように支援すればよいのか、自身の考えを述べました。

やまぐち　るな
山口　瑠菜さん（埼玉県立和光国際高等学校１年）
“Chain of Poverty”

SDGs の目標 1（貧困をなくそう）において、特に児童労働の問題にフォーカスして発表しました。児童労働を目の当たりにした経験から、世界の貧困に苦しむ子どもたちを支援するための、寄付や啓発活動、フェアトレード商品の購入など、人々が日常的に取り組める解決策を提案しました。

Special Presentations from Exchange Students

審査時間を利用して、本学協定校（タイ、韓国、ベトナム）からの５名の交換留学生によるプレゼンテーションが行われました。それぞれの国や大学を、流ちょうな日本語で紹介してくれました。

最後に、審査員を務めた人間科学部ケビン・マクマナス准教授による総評がありました。人前で堂々と発表し、地球の問題解決に踏み込んだことへの賛辞が送られました。発表者それぞれが、十分に時間をかけ、テーマを深めるための綿密な調査に基づく内容で、聴きごたえのあるレベルの高いコンテストだったと締めくくりました。